

## 幻の結核特効薬(1) プロフェッソル・コッホの肺労新療法

薬学雑誌 1891 年度(明治 24 年)p 56-59, 61-62

戦前、結核は世界的に深刻な病だった。コレラやペストのように皆いっせいに感染して死ぬ流行病ではない。若くして選ばれた 1 人が静かに血を吐き、長い闘病のあと死んでいく。シヨバン、沖田総司、高杉晋作、正岡子規、樋口一葉、石川啄木、滝廉太郎。「生きていたらどんな偉業を成しただろう」と世間に惜しまれただけでなく、恋人、親、兄弟姉妹との別れは悲痛なものがあった。野麦峠、永訣の朝。悲しみは幾つもあった。

1890 年 11 月 14 日の朝、すごいニュースが独逸医事週誌に載った。そんな結核の特効薬が伯林のコッホの手でついにできたというのだ。陶板で二分した容器の上部に結核「バチルルス」を培養した肉羹汁のゼラチンを入れると、菌が繁殖するにつれゼラチンが溶け、液が下部に滴下する。これは細菌を含まず、バチルルスの生活によって生じた物質を含むという。

その 0.25 mL をヒト(コッホ)の腕に注射すると、3 時間後

に四肢牽引、倦怠感、咳嗽、呼吸息迫、5 時間後に激烈な戦慄が 1 時間続き、悪心、嘔吐、体温上昇(39.6 度)、12 時間後に正常復帰した。一方、患者は健人にまったく作用のない 0.01 mL でも猛烈な反応を示した。激烈戦慄、体温 40~41 度、四肢激痛、嘔吐、黄疸、発疹。これら発作は 15 時間も続く。

局所反応は結核の一種、狼瘡において最も著しかった。背中に注射したにもかかわらず、顔面の狼瘡患部は発熱、腫起、紅潮、壊死した。滲出した漿液が乾いた硬塊は 2、3 週間後に脱落、癬痕を残し完治したという。リンパ腺、骨、関節などの結核も、その場所が腫起、紅潮、発熱するため、極めて鋭敏な診断が可能となった。初期の肺結核患者は、4~6 週間でほぼ治癒したとある。

当時は船しかない。電報はあったが「全世界に大振動を与えたる」ニュース詳細は、日本まですぐには伝わらなかったようだ。薬学雑誌 11 月号、12 月号には何の記述もない。衛生試験所 5 等技師、薬誌編集委員の古川 栄による記事全訳、興奮の文章が載ったのは 1 月 26 日発行の新年号だった。

以上は、ツベルクリンのことである。ご存知のとおり治療効果はなかったのだが、当時は誰もが特効薬と信じた。

小林 力